

他界と方位(その一) : 陰陽五行思想との邂逅

前城, 直子 / MAESHIRO, Naoko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

1988-03-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002573>

他界と方位（その一）

——陰陽五行思想との邂逅——

前 城 直 子

一

幼少の記憶の中には、思いがけず、後年の研究テーマへとつながっていくシーンが、けざやかに登場してくることもある。

わが挿籃の地は、神々の島久高島を真東に臨み、その直線上の真西に、凜乎としてそびえ立つ名にし負う齋場御嶽を持つ、古琉球神聖地界の知念半島である。

小学校入学の往時は、戦後の復興もまだままならぬ頃であった。雨の日も、風の強い日にも、私たちにはめったにバス通学が許されなかった。道草の時間も含めて、片道およそ一時間を要して、「わんじん坂」^{びんざん}を昇りつめ、学び舎への道を歩いた。

ことに登校時のあわただしさとは違つて、時がゆるやかに流れていく下校時の道草は、今にして思えば有益であつた。「あまんちゅ」伝説でもつとに有名な「わんじん坂」を再び下つて安座真に至ると、県道を入れ、農道に入り、そこからさらに危険な海岸べりの道なき道を好んで歩いた。今ではもう昔日の景観はないが、海岸べりには、あだんの木がうっそうと茂つていた。

あだんの木のことかしこに、時々猫の死骸がつるざれていくことがあつた。いつもの見なれた光景ではあつたが、猫といえどもムクロと化して次第に朽ち果てていくその姿は、おさな子をおどすには十分であつた。昨日とはおよそ様子の違う猫の死骸の前で、今日も私達は決して無言で立ちどまり、しばらくはじつと見入っているのだが、やがてえも言われぬ薄気味の悪さに、足早にその場を立ち去っていくのが常であつた。

後年、陰陽五行思想の哲理に触れた時、このシーンがゆるがせに出来ぬ重大な学問的意義を持つものであることに気付いた時、つき動かされる感動を覚え、静かな決意が湧いてくるのを禁じ得なかつた。

陰陽五行思想では、猫は木氣に属する動物である。木氣は方位で言えば東である。木氣の猫は、死して木氣に帰してやろうというのが、このシーンを現出した人々の心意であつたのであろう。他所ではどうであつたかを知らないが、ニライ・カナイを真近かに真東に臨む、海岸べりのあだんの木につるざれたその光景は、日本古代信仰と、深遠な哲理を持つ中国古代宇宙哲学とがなймаぜになつた

人々の心をシンボリックに表出したものであることを知った時、感動も決意も不動のものとなつていった。

事例はこの他にも多いが、このように古琉球においては、中国古代宇宙哲学である陰陽五行思想が確実に根を下ろし、今日に至るまで民俗や祭祀の根本を形成しているといつても過言にはならない。

王府と大陸との蜜月時代を勘考すれば、けだしこれは当然のなりゆきであつたと筆者には首肯される。本稿では、これまでとかく、古代日本の博物館・古代日本の鏡として、古層をより忠実に温存してきたとされた古琉球の古代信仰軸の問題に、新たなメスを入れてみたいと思う。現在の筆者の貧弱な知見では、十分な解剖をなし得ないことは、もとより筆者自身が一番よく承知しているところである。しかしこの問題を忽ち付しては、古琉球最大のテーマである他界観は、ヴェールにとざされたままになつてしまふ。そこで不十分なながらも、これに手を染めてみたいと思う。古代日本がそうであつたように、否、それ以上に古琉球もまた、深遠な中国古代宇宙哲学との邂逅によつて、古代信仰軸に新たな哲理化が展開されていることを、日琉の比較を通して瞥見してみたいと思う。

二

今日においても、生命の誕生に人は神秘感を抱き、死は何人にとつてもあらがいがたい。古代人も

また今日の我々以上に、生死の問題を人生最大のテーマとし、その去来をさまざまに思考している。他界とは言うまでもなく、この生と死を領有した此界の彼方にある世界である。他界・異郷・異空間・常世・理想郷と、今日各様に命名されている彼等の思考と信仰の足跡は、驚くばかりに高度な哲理化がはかられている。生と死のほかに他界は、いかなる機能を持っていたのか、また他界の方位はどう思考され、どのような変遷をけみしてきたのか、古代日本との比較の上で、古琉球のそれを探ってみたいと思う。

(一) 天上他界

言わずもがな、天上他界とは、高天原と呼称される神々の世界である。記紀神話にとって最重大なこの天上他界は、これまで諸先覚によって執拗に追跡され、またほぼ明かし尽くされたと言ってよい。この他界が、ある国家的構想、すなわち天皇の神権統治・政治理念の結実化へむけ、古伝承を潤色・改変・統制し、質的転換をはかったものであることは、今日ではむろんもう定説である。天にあって四方に照り輝く太陽、きらめく星空、天がける鳥……それらを見やりながら、上下の階層を問わず、古代人は白雲のはたてに他界を思い描いたはずのものである。しかしこれがいったん統治者の統治原理・政治理念と結びついていった時、必然的に政治的・国家的使命を帯びた神聖世界へと傾斜していく過程は、日琉共に同様の道をたどっていった。これについてはかつて筆者も詳論した⁽¹⁾。縷述の煩を省きたいので、詳細は前考にゆだねたいが、本論の展開上改めて以下のことは確認しておきたい。

(1) 神々(天孫族)の生命の根元地

すなわち、記紀神話における天上他界の最大の機能および特質は、天孫氏族の生命や天壤無窮の神勅に見られるように、あらゆる天皇権の根源地と観想されている点であろう。

天上他界には、高天原バンテイオンの至高神かつ皇祖神・天照大御神やその子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命をはじめ、神々が住み給う他界であった。この他界から、葦原中国という此界を統治すべく、生まれたばかりの番能邇々芸命^{ホノニニギ}が天孫として降臨する図式がはかられていく。むろんこの図式は、記載化当代の政治的思考の産物ではあるが、ともかくこの天上他界が、天孫氏族の生命の根源地と観想されている点は明白である。

(2) 神々(天孫族)の死後の世界

ところが万葉歌に見る天上他界には、次のような側面もある。

ひさかたの、天知らしぬる、君故に、日月も知らず、恋わたるかも(巻二二〇〇)
 ……(前略) 和東山、御輿立たしてひさかたの、天知らしぬれ、こいまろび、ひづち泣けども

為むすべもなし(卷三—四七五)(傍点筆者。以下同)

前歌は高市皇子⁽²⁾尊の殯宮の時の柿本朝臣人麻呂による作歌であり、後歌は、大伴宿禰家持作歌の安積皇子⁽³⁾薨去に対する献呈挽歌である。「天知る」とは、すでに言われているように「天を支配する」意であり、殯宮歌・献呈挽歌という性格から、「天を支配する」とは、死後は天上に赴き、天上をお治めになる意と解される。また人麻呂の⁽⁴⁾日並し皇子⁽⁵⁾尊の殯宮歌にも

……………(前略)高照らす日の御子は、明日⁽⁶⁾香の清の宮に、神ながら太敷⁽⁷⁾きまして すめろきの敷⁽⁸⁾きます国と、天の原岩戸を開き、神上り、上りいましぬ……………(後略)(卷二—一六七)

とあって「この国は代々の天皇がお治めになるべき国であるとして、(天武天皇は)天の原の岩戸を開いて、神のままに天上に上ってしまわれた」という意味である。「天の原の岩戸を開き」云々は、天武帝の崩御のことを指すが、この挽歌も、やはり死後、天上他界に昇天されたことを歌っているのである。

このように、記紀神話中大きな比重を占めて語られている天上世界は、万葉歌によれば特別の人々が死後そこに赴いて、また再びそこを支配するところでもあった。特別の人々とは、むろんかく歌われている歌の中の人物達を指すのであり、この人々が天孫氏族に限られているので、天上他界は、皇族の死後の他界と観想されていたことがわかる。この思考や観想がより明確により徹底的に示されているのは、高天原の死者天稚彦が、天命を復奏せず討たれて死んだ紀の条に最も完璧に表れていると

言えよう。

すなわち、天稚彦が死んだと知るや「時に、天稚彦が妻子ども、天より降り来て、柩⁽⁹⁾を將て上り来て、天にして喪屋を作りて殯し哭く」と第一の一書は伝えている。高天原の人々は死後、決してこの国にとどまるべきではなかった。屍は、すぐに高天原に移され、高天原の土に返してやらねばならなかった。万葉歌に示されていた歴史時代の天孫氏族にも、この思考は貫徹され、天孫氏族は死して再びその生の淵源地へと帰っていったのである。このようにして、天上他界は、天孫氏族の生と死を領有する他界であったことが導き出されるものである。⁽¹⁰⁾

では、古琉球の場合はどうであろうか。

一聞⁽¹¹⁾え煽りやへや

君⁽¹²⁾ぎや精⁽¹³⁾ 降⁽¹⁴⁾れわちへ

按⁽¹⁵⁾司⁽¹⁶⁾添⁽¹⁷⁾いや

おほつ鳴響⁽¹⁸⁾む

君⁽¹⁹⁾ぎやせぢ みおやせ

又⁽²⁰⁾鳴響⁽²¹⁾む国守⁽²²⁾りや

真⁽²³⁾末⁽²⁴⁾ 願⁽²⁵⁾て 降⁽²⁶⁾れわちへ

又⁽²⁷⁾てだが末⁽²⁸⁾按⁽²⁹⁾司⁽³⁰⁾添⁽³¹⁾いや

末勝る王に

又おほつせぢ 有らぎやめ

君ぎやせぢ 有らぎやめ

又天ぎや下 添て

首里社 栄よわ (第十二—七四二)

右のオモロに見られるように、古琉球においても国王と「おほつ」(天上世界)の関係を「てだが末」(太陽神の子孫)と位置づけているので、やはり国王——天孫氏族の生命の根源地と捉えている特色が指摘される。ただし、「おもろさうし」における天上他界観は、記紀神話と同様に、神来臨に水平表象と垂直表象のバラレルな構造意識が導かれ、極めて強い政治性が看取される。しかもこれが、オモロ編集の過程でなされているので、後次的所産である蓋然性が高いものである。古琉球における宗教的・政治的神学の形成過程は、記紀の成立よりはるか後世に整えられていくので、本論のテーマである他界の信仰軸の変遷を考える上でも重要な視座をしつらえてくれることになるが、後述に譲りたい。

ところで古琉球天上他界の観想には、記紀神話には見られない二つの際立つ特色が挙げられる。第一は、国王命の根源地と称揚されるおほつ世(天上世界)の靈力が神女の媒介によつてなされる点である。てだが末・日の御子である国王も、王宮に繁栄をもたらず「おほつせぢ」が、神女によつて降

るされ、奉られるという観想である。これは記紀の神学思想の考察にも重大な視点を提供するものである。

あと一つの特色は、死せる天孫氏族が天上他界に赴き、再びそこを領有して治めるといふ古代日本の観想が認められない点である。これもまた、古琉球の古琉球たる所以のものである。一面、政治的・文化的・宗教的・歴史的背景を異にした古代日本の天孫氏族が、常民との徹底的な俊別化のために、躍起に、完璧に構築していこうとした天上他界観が古琉球では粗雑である。古代日本とは事情を異にしていることが最大の理由だが、しかしそれでも我と彼を切り離し自らの出自を天上他界に求めんとする王者の心意には、信仰軸の大転換という重大な志向性が跡づけられる。日琉のこのあたりは、双方の解明に大きく裨益するところであるが、これも後で触れたい。

(二) 虚空他界

この他界は、先の天上他界と不離密接な他界である。天と地の間にあって、天地間の往来に登場するのが虚空他界である。

二ニギノ命の天孫降臨に際して、紀の第二の一書は「時に虚空に居しまして生める児を天津彦火瓊々杵尊と号す。因りて此の皇孫を以て親に代へて降しまつらむと欲す」として例の日向の高千穂の峯に天下ったことは、人のよく知るところである。そしてこの降臨に際して、鼻の長さが七尺、背

の長さが七咫、口尻が明り耀^{あかり}って、眼は八咫の鏡のように、赤酸醬^{あかかかぢ}のように絶然^{てりかぢや}いた異常な神が出迎えた。天鈿女に尋ねさせると、「吾が名は是、猿田彦大神」と名告り、天孫の先導のためやってきたと答えた。その出迎えたところが「天八達之衢」(紀)であり、記は「天之八衢」と記し、そして「上は高天原を光し、下は葦原中国を光す」ところであると説明している。宣長は、「天は虚空の上に在て、天ツ神たちの坐ます御国なり」とした上で、両者の違いについて、天津日高、虚津日高の使いわけによって次のように説いている。まず、谷川士清が「天津日高は天子の称、虚津日高は太子の称」とする考えを肯定した上で「虚空は、天と地との中間なる故に、天津日高に垂て尊み申す御称なるべし」とし、天と虚空とを明確に区別して把握している。益田勝実氏もこの宣長の考えを継承した上で、先のニニギの出生場所「虚空に居しまして生める」空間を「アメとツチとの間にオオゾラというところに居住できる世界」を想定された。三谷榮一先生も、竹取物語、宇津保物語、更級日記などを例証として、平安時代になっても「オオゾラ」という異空間を設定していることは、常民意識に古代からの思考、観念が反映している結果だと説示された¹²⁾。

このように、虚空他界は、高天原・天上他界とひと続きの神々の世界であることには違いない。では、この点につき、古琉球ではどうであろうか。

「おもろさうし」でも国王のことを、「天加那志」(十一—3)、「天清ら」(十一—513)と呼称し、特に個別的に尚清王の神号に「天継」(四—199)を充当させている例もある。また、太陽のことを「天地鳴響む大主」(十三—834)、国王のことを「天地鳴響む若主」(十一—513)として、天—太陽—国王の図式は顕著であるが、虚空他界の意識は見られないようである。しかし、八重山では、虚空のことを「ティン、ヌ、ナカシタ」(天の中下)というようであり、言語意識の面では明確に細分化の傾向はかいま見られるものである。なお「天地」は、記紀万葉にも「天地」の表記がある。宣長がこれを「天地は阿米都知の漢字」であると云っているように、むろん漢語である。万葉表記では「阿米都知」「安米都知」とあって、「天地」も「アメツチ」と訓読されていたことがわかる。古琉球の古謡歌であるオモロがこれを「アメツチ鳴響む」とせず、そのままストレートに「テンチ」と発音しているのは興味深い。漢語が民衆のオモロの中にもすっかり根を下ろしているということであり、その定着度たるや相当のものであるか、もしくはその表現が新しいかのいずれかであろう。また「天地」を「地天」と語順を入れ替えることによるオモロのリズムのちがいが大きく、耳新しい感じもする。

このように「天」「地」の明確な把握の他に、「虚空」という空間の意識、ましてやその「虚空間」に、神々が居住する他界があったと考えた古代日本の他界意識は、古琉球他界には見られなかったと見てよさそうである。

(三) 山上(中) 世界

(1) 神降臨の場

さて、虚空他界から葦原中国に降臨すべく天孫ニギノ命がまず降り立ったところは、「天の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、稜威の道別き道分きて、天の浮橋にうきじまり、そり立たして、筑紫の日向の高千穂のくじふる嶺に天降りまさしめき」とあるように、まず、高千穂の山に降り立った。「高千穂」とは、日向国臼杵郡にある高千穂山とする説と、日向国諸県郡と大隅国贈於郡とにわたる霧島山に比定する二説がある。古来より論争の絶えないところであるが、ともあれ、高天原の天つ神々は、垂直にそびえ立つ山を媒介として、此界に降り立つのである。山上(中)の石位が神聖な他界と観想されていたのである。

(2) 葬所としての山

だが、山上(中)は、此界・中国の人々にとってまた等しく他界であった。

イザナミ命は、鳥生み国生みの果てに、火神迦具土神を生む。ところがこの火神出産が原因で病臥し、ついには神避ることとなった。屍は、出雲国と伯伎国との国境にある「比婆山」に葬られた。出雲と伯伎の国境という方位も、後述するように古代人の他界観の考察において重要であるが、今

は死者の葬られるところが山上(中)であることに特に注意を払いたい。

古来、日本人にとって、死者は山に帰るものとする意識が強く、死ぬことを「山行き」といったり、魂乞呪術・靈魂信仰として、「山尋ね」の風習があることは、今日においてもよく知られているところである。

万葉人も

かくばかり、恋ひつつあらずは 高山の岩根し枕きて 死なましものを(二一八六)
鴨山の、岩根し枕ける、我をかも 知らにと妹が 待ちつつあるらむ(二二三三)

と歌っているように、死者と山と他界を結びつけていたことは明白である。重浪寄す海べに暮らす古代人にとって、彼方にそびえ立つ山は未知の世界であり、まぎれもなく他界と映じたのであろう。

(3) 豊穰の源泉地

だが山は、死の他界であると共に、豊穰の源泉でもあった。

高天原を追放されたスサノヲノ命は、出雲の肥の河上の鳥髪という地に天降った。そこで大山津見神の孫娘・櫛稲田比売と結婚する。櫛(奇)稲田比売とは、稲田の豊穰をたたえた名で、スサノヲノ命はこの比売や、大山津見神の他の比売・神大市比売との結婚によって、次々に農耕に位置づけられる神々を誕生させるのである。すなわち稲の豊穰をもたらす大年神や、食物霊(稲の霊)を象徴する

宇迦之御靈神が出現するのである。

さらに、スサノヲ系譜二世孫や三世孫には、農耕や稲作と不可分の水の神深淵之水夜禮比売や淤美豆奴神を誕生させ、ついに六世孫には、かの最大の国土神大国主命の出現となる。これは山の神の女との結婚により紹来されたのであり、中国の人々にとって、山はまた豊穡の源泉としても観想されていたことを示すものである。

(4) 天皇帝の根元地

常民と同様にして

山は天孫氏族にとっても、また重要な呪力を秘めた他界でもあった。天孫ニギノ命は何度も触れたように、日向の高千穂峯に天降りした。ここでも天孫がまっ先に出会うのは、まず山の神大山津見神女、木花の佐久夜毘売であった。佐久夜毘売の父・大山津見神は、天皇帝の永遠性を保証するため、佐々夜毘売の姉・石長比売と佐々夜毘売とを共に、天孫の妻に差し出す。しかし、ニギギノ命は醜い石長比売を返し、美しい木花の佐久夜毘売のみを受け入れた。これが原因で、永遠であるはずの天皇帝も有限のはかない命として生を閉じることが語られている。これを、

倉野氏は

山
木花……………美……………短命
石(磐)……………醜……………長命

と図式化された¹⁹⁾。すなわち該神話には、木―石、美―醜、長―短という二元論を根底にしなが、山の神が天皇帝の無限性をも掌握していた他界の盟主であったことを示すものである。

かくして、記紀神話における「山」が死者の落ちゆく他界であったと共に、生命の根元・豊穡の源泉としての多重機能を持つ他界であったことが導かれるものである。

では、古琉球の場合はどうであろうか。古代日本の山上(中)他界にあたる観想は、古琉球においてはまず御嶽信仰が挙げられよう。琉球列島を普遍に覆いつくしている御嶽信仰であるが、その呼称においては多少の地域差が見られるようである。すなわち、

奄美諸島　おがみ山・オボツ山・神山・グスク
沖繩諸島　ムイ・ウガン・グスク
宮古諸島　スク

八重山諸島　オン・ワー・ウガン・スク

以上の通りであるが、これらを総称して「御嶽」の名称を与えたのは、首里王府であろうとする指摘は、次に示すお嶽数の分布状況と共に、琉球王府の新宗教基軸の移行・展開という筆者の予想を裏付ける、きわめて重要な材料となる。すなわち次のようである。

首里29 那覇・泊8 島尻29 中頭210 国頭(伊江島を含む)143 伊平屋諸島22 鳥島7 粟国島
9 渡名喜島6 久米島29 慶良間諸島37 宮古29 八重山76

この分布状況・密度の濃淡について仲松氏は当時の①開発度、②生産性などに基因すると見ておられる²⁰。確かにそれも重要な要因と考えられよう。しかし、御嶽信仰とは、こと、宗教政策、ひいては権力者の政治理念とも不可分に係り合っている大事である。御嶽の分布状況は、開発度や生産性よりも、宗教性や政治性の問題が先行するものではなからうか。おいおいこの問題は、根ほり葉ほり突っ込まなければならぬ重要な課題になるが、ここでは、国頭(伊平屋・伊江島を含む)一六五、中頭二一〇、島尻二九七と、南北の子午線上に濃密に分布し、明確な特色を見せていることを、まずは指摘しておくたい。

それでは、古琉球におけるお嶽信仰の機能的種々相について瞥見することにした。

(1) 始祖降臨型

「琉球国由来記」に載っている各御嶽の由来譚を一瞥してまず気付くことは、天上より此界に村々の始祖となるべき人物が天降ったと観想する始祖降臨型が挙げられよう。

「大城御嶽」の由来譚によれば、「往昔、右神(筆者注・女神豊見赤星テタナフラハイ)狩俣村東方、島尻当原ト云フ小森ニ、天降シテ、狩俣村後、大城山ニ住居ス²¹」とあって、まず小さな森に天降

りし、しかる後に大城山に住居を定めた。その後、若い男が夢に現われ、しばらくして懐妊し、七ヶ月後に双子の男女を出産する。初めて会ったものを父と定めようと決心し家を出た。山の前の瀬で巨大な蛇が這廻っていた。蛇はその双子を見ると首を揚げ、尾を振り、躍って喜びを示した。そこで、先に夢で見た男は、蛇の変化の身であることを知った。此の男女が狩俣村の始祖であるという伝えにより、氏神として御嶽に祀ったという由来譚である。三輪山型信仰と同種の由来譚で、琉球列島のそこかしこに見られる蛇信仰の系列下に置かれるものである。三輪山型伝承の意義・特質・発展等の問題には、重大なものがあるが、これはこれで別箇のテーマであるので、後日の検討にゆだねたい。ともかく、御嶽信仰の一の特徴として、始祖降臨・村立て由来を背景に持つものが多い。これは記紀神話において、山が天孫降臨の場と観想されていることと同一の思考であると言ってよい。

(2) 葬所型

御嶽が特別の人の葬所になって、信仰の対象になる場合がある。

大里間切「コバダウノ嶽²²」の由来譚によれば、宮城村にヲソコ川という神威盛んな川があった。ある夜半、その川に天女が三度舞い下りて沐浴をしたという具合に、「天の羽衣」に似た話が展開される。結末が羽衣説話と異っていて、この天女はついに天上に帰ることなく、男女各一人の子を残して命終した。男の子は宮城の地頭となり、女の子は女巫になった。天女の墓は同嶽の「一ツ瀬」という

大石の上に葬られ、以後、信仰の対象となったという伝えを載せている。

慶良間島渡嘉敷間切の「船藏御嶽」²³の由来譚では、さらに墓所としての御嶽の性格が濃厚である。すなわち、渡嘉敷間切の祭祀に尽した一人の巫女が死去すると、「船藏山ニ葬也」とあって、明確に墓所であることが示されている。その「墓所ヲ今迄擇ミ所ニ仕来ル也」とあるように、村の祭祀に尽した特別な巫女の葬所が御嶽であり、そこが信仰の対象となっている経緯がよく語られている。御嶽から人骨が発見されることは多く、考古学的にも御嶽ニ葬所は首肯されるものようである。

このように、古代日本においても「山」が葬所としての他界であったと同じように、古琉球においてもまた同様な観想が見られるものである。

(3)航海守護型

宮古島「池ノ御嶽」²⁴の由来によれば、往古男女の二神があつて、池の山に天降りした。船守の神として人々の信仰の対象になった由来を次のように記している。この御嶽のある山の麓に、船置場があつた。ある夜、大火があつて、村の家々を悉く焼き尽した。火焰は船着場をも襲い、人々は船もろ共に焼失したものと心配した。しかし、船屋は焼失したが、船は無事沖の方に誘導され無事であつた。これは、この神の神力の故であろうと、いよいよ人々の信仰の対象になったと記しているように、御嶽には航海守護としての機能も極めて顕著に見られる傾向である。

ところで、「琉球国由来記」に見る御嶽由来譚には、一つの大きな特色が挙げられる。それは、宮古、八重山諸島における御嶽由来譚が、神話・伝説・昔話等と結びついて、バラエティに富んでいるのに対し、沖縄本島のそれは、由来譚が稀薄であり、しかも機能的には航海守護がほとんどである。両者には、明らかに大きな逕庭があるが、詳しい考察は時間がなく果たせなかつた。今後の課題である。

以上が、お嶽信仰の主な断面である。日琉における山上(中)信仰の諸相と比照した場合、そびえ立つ山上の石位は、天孫や始祖が天降りするところ、換言すれば、天と地を結ぶ聖機能を果たすべき空間としての把握が明確である。そして日琉共に、山は、死してはまた再びその聖空間へと帰るべき他界でもあつた。

日琉の他界信仰の大きな相違は、国つ神たる山の神の位置づけである。

古代日本の山上(中)他界は、古琉球のそれよりはるかに大きな比重を占めている。したがって山の盟主たる山の神の職能も、文字通り山の幸を領有する農耕神としての存在態でもあつた。その上、ある時期、権力者による神統譜の整理統合がはかられた時、天つ神に隷属する国つ神の代表たる霊格として山の神が位置づけられてくる。それゆえに天孫ですらも、すでに見てきた通り、山の神の女との結婚を通してのみ、その機能が移譲され、強化されるのであり、また此界における天皇命をも管掌したのが山の神であつたのである。つまり、古代日本の山上(中)他界は、聖なる空間としての機能

と、その空間を領有する山の神そのものにも、重大な職能が付与されていることが導かれるものである。

古琉球の場合は、ウンジャミ祭をはじめとして種々の農耕祭祀に見られるように、聖空間としての山の認識は強いが、歴大な南島歌謡を一瞥した限りにおいても、古代日本のように、明確かつ重大な山の神の職能が導かれず、存在態としての山の神そのものが極めて薄いと云えるのではなからうか。代りに海岸民としての面目が、航海守護神たるの職能に躍如とした特色を示しているものといえよう。

(四) 地底他界(黄泉国)

地底他界と言えば、何人にとつてもまっ先に浮んでくるのは黄泉国であり、同時に、大八洲国の生成の中途にして、火神出産によつてついにみまかつたイザナミノ命を思い出すに相違ない。黄泉国と聞けば、反射的に死の国と連想が導かれるように、この他界には、まぎれもなく悪霊邪鬼のひしめく、汚穢な暗いイメージがまつわりついて離れない。

所在についても、諸説必ずしも一致しているというわけでもない。「黄泉平坂」という「坂」を紹介して、葦原中国と地続きにつながっているようにも考えられる。松岡静雄に代表される「我がヨミ神話には、少しも地下といふ趣きは出ておらず、出雲からヨモツ平坂を越えて地続であるかのやうに物語られて居るのである」⁽²⁵⁾とする見方がある。ところが「鎮火祭の祝詞」には、「吾名妹乃命能。吾乎

見給布奈止申乎。吾乎見阿多志給比津止申給氏。吾名妹能命波。上津国乎所知食倍志。吾波下津国乎所知牟止申氏」⁽²⁶⁾とあるように、葦原中国(明界)を「上津国」と言い、黄泉国(冥界)を「下津国」と言つて、明らかに地下に想定している。記紀神話中、重大な比重を以て語られているこの他界には必然的に先覚の情熱も大きく傾注されてきた。黄泉他界に関する諸問題については、今さらめくので割愛するが、本稿に即して以下のことには注意を払いたい。黄泉国と言えばイザナミ、イザナミと言えば黄泉大神という図式で、我々はイザナミノ命を黄泉国を領く大神たる存在態として把握している。ところが津田をはじめ先覚がすでに問題にしてきたように、イザナミノ命はまた国土の生成を具現していく生成の大神たる存在態でもある。大八洲国の山川草木に至るまで、ことごとく生み成していった生成の大神としてのイザナミと人草生殺問答における死を掌握するイザナミの霊格には、相矛盾するものがあると言える。すなわちイザナミノ命は、生死を領有した存在態としての霊格が明確に認められるものである。一体このことは、いかように理解されるべきであらうか。

いきなり結論めいたことになつてしまふが筆者は目下、次のように考えておきたい。これまで他界の機能・特質を瞥見してきたが、生と死を対立的にあるいは分離的に把握するのではなく、生死を統合して捉えるのが、古代の他界の最大の特徴であると思う。天上(虚空を含む)他界・山上(中)他界もそうであつたし、以下に述べる根の国においてもまた然りである。古代の他界には生死を統合する原理が見出せるものである。ただし、黄泉国においては、他界のこの原理が、黄泉大神Ⅱイザナミ

命という図式で、特定の霊格の職能と変化し、しかもこの霊格が明幽両界にわたつての存在態となっているため、曖昧性・不統一性を残していることは否めない。

だが、死の国黄泉国においてすらも、やはり生を領有する原理があることは、他にも例証を挙示することが出来る。

国土生成の途上、火神出産が原因で神避つたイザナミの後を追って、例によってイザナキは妻に目見えて再び顕国へ連れ戻そうと、黄泉国まで出迎えに赴く。すでに黄泉戸喫を経て黄泉国の成員になつたイザナミではあつたが、夫の熱情にはだされて、「還らんと欲^{ほつ}ふを、且く黄泉神と相論^{あひかた}はむ。我をな見たまひそ」と、夫イザナキの意志を受けて、新生の命を得て再び死者の国から生者の顕国へ還りたいと思う。その再誕の交渉を、今一度黄泉神に持ちかけてみると答えている点である。死者のたむろする黄泉国は、同時に新生の命をも保証するところでもあると見られる当該部分は、従来ほとんどそのような指摘がなされていない。むしろ黄泉国には一つ火を燭さねば何も見えない暗闇の地下のイメージも確かにあつて、しかも「黄泉醜女」という悪霊邪気もひしめいている。しかし、よくよく神話を繙いてみれば、悪霊邪気の暗躍も、禁止干犯が原因なのである。神話は、そこがあるいは「死還生^{よみがへ}」(黄泉路帰り)、再誕が保証されるところでもある生命の根源を司る機能をも併せ持つていた他界であつたとは言えまいだろうか。従来、黄泉国と言えはすぐさま死者の国と置き変えられてきた。それは確かにその通りで否定すべくもない事実ではあるが、同時に新生を保証する他界でも

あつたことを、この際は強調しておきたいと思う。

(五) 根の国・妣の国

大国主命の「根国訪問」に見る根の国もまた一の大きな他界である。記紀によれば、兄弟神・八十神の度重なる迫害をのがれ、母にすめられるまま、大穴牟遲命が逃げのびて行つた他界が根の国であつた。

根の国には、大穴牟遲の祖神・スサノヲノ命がましますことによつて、一般に根の国は祖霊の国と考へられている。また、根の国に至る通路に、「黄泉国」が出てくることによつて、「釈日本紀」が

○問、伊奘冉尊既行ニ黄泉^{ヨミ}。而今云レ從ニ母於根国^ニ。然則泉国^{ヨミ}与ニ根国^ニ為レ同哉。答、先師相伝云、根国、一名ニ泉国^ニ。故上文云ニ泉国^ニ、今此云ニ根国^ニ、其实同耳。又素戔嗚尊就^ニ於根国^ニ、又謂就^ニ黄泉国^ニ耳。

と記しているのに代表されるように、宣長をはじめ多くの研究者は、黄泉国と根の国とは同工異曲と捉えている。確かに両他界は親縁関係が深いが、一方には両者は異質の他界と考へる向きもある。いずれにせよ、根の国というのであるから、民族の根元の地、本貫の地、本つ国であることは確実であり、そこにスサノヲノ命がいることによつて、死してはそこに帰る祖霊の国と観想されていることも

確かである。

ところで、根の国訪問神話の特色は、祖神スサノヲノ命によって蛇・呉公・蜂の室に入れられ、鳴鏑を大野の中に取りに行ったところを焼きうちに会うという具合に、数々の試練が課せられるシーンであろう。今日、このシーンの意味は、死んで生まれ変わる成年式、あるいは、民間の成年式の儀式的集約である天皇の即位式、すなわち大嘗祭の共時的な祭式の投影と解釈されている²⁹。したがって室や焼きうちの試練は、成年式や大嘗祭における孤独な暗い物忌みであり、同時にそれは祭式的な「頓死」を意味し、その結果、あらたな靈性を獲得し、偉大な王者としての地位や富を得て再生する構造がはかられている。果たせるかな、数々の試練を、須勢理毘売という根の国の巫女の指示によって突破した大穴牟遲命は、政治的支配力を詮表する「生大刀」「生弓矢」を得、さらに宗教的支配力を示す「天の詔琴」を得て、政治的・宗教的王者として新生する³⁰。新生の王者は、過去の神名も新生と共に捨て去られ、「大國主命」という、まことに目出たい言霊を負った偉大な國つ神として再生するのである。

このように、根の国訪問神話のエッセンスを一言を以て表現すれば、私は該神話もまた生と死を統合する根の国他界の機能を説いたものに変わりがないことに注目しておきたい。

なお、妣の国とは、スサノヲノ命が「僕は妣の國根の堅洲國に罷らむと欲ふ」という言や、稲水命が「妣の國として海原に入りましき」という条に見出せる語である。これを特定の妣（亡母）すな

わちスサノヲノイザナミ、稲水命―玉依毘売と解釈することも出来ようが、ここでは、われ等の遠い祖先たちが、母國・魂の故郷・本つ國と憧憬した広義の意味に解しておきたい。その意味では、祖靈の地とされる根の國と重なる面もあるが、稲水命の条に見るように、それが地底や地続きの地ではなく、海原となつていことに意を払いたい。すなわち、本つ國の異郷も、地底、地続き、海底、海原と不定的、多義的に思考された憧憬の他界であつたと理解しておきたい。

(六) わたつみの國

これまで何度も登場したニニギノ命は、山の神の女・木花の佐久夜毘売との間に三人の男の子を生む。兄は海幸彦、末弟は山幸彦といい、記紀に見る海幸山幸の話が展開する。そして失った鉤を求めて訪ねたのが海宮のわたつみの宮であつた。

まず、ワタツミの國と言われるこの他界は魚鱗の宮殿であると、より具体的なイメージが与えられている。宣長はこれについて「壮麗く大なる宮の、殿門など、数多並立連りて見ゆる状を、譬へたるなるべし」と注解し、壮麗な宮殿が林立するまばゆいばかりの國であつたと観想されている。山幸彦は海神の女・豊玉毘売と結婚し、三年の間歎き一つ出ない幸福な日々を暮しているのであるから、このワタツミの他界は仙郷の最至近距離にあると言つてよいだろう。後世ワタツミの海宮は、仙郷常世の國へ流れ込むのであるが、すでに記紀の神話の中においても鮮麗で幸福なユートピア志向性は

認められるものである。しかし仔細に検討を加えてみると、これが前出二つの他界（黄泉国と根の国）と密接不可分に関係し合っていることもまた否定出来ない。

さてその所在地であるが、潮路をつかさどる「塩稚神」や「吾舟を押し流さば……味し御路あらむ」とされる叙述部分から推し置れば、海のはての潮の八百路のその先にある国という感が強い。しかし他方では、ワタツミの国から見ても、葦原中国は「海中」を渡っていく「上つ国」とされ「海坂」を経た「海底」に位置するものとも考えられている。

ところで日本書紀では、「火火出見尊を繋ひ著けまつりて沈む。（中略）時に海の底に自づからに可憐小汀有り³⁴」とあって、海宮は明確に海底であるとされている。「鎮火祭の祝詞」にも「吾が名妹の命は上つ国を知らしめすべし、吾は下つ国を知らさむ³⁵」とあって、上つ国Ⅱ人間界以外の他界はすべて下つ国Ⅱ海底の国との認識が掬い上げられそうである。この認識は「大祓の祝詞」ではさらに顯然として、もろもろの罪の落ち行く先を「天の下四方の国には、罪といふ罪はあらじと（中略）大海原に押し放つ事の如く（中略）、遺る罪はあらじと破へたまひ清めたまふ事を、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織つひめといふ神、大海原に持ち出でなむ。かく持ち出でなば、荒塩の塩の八百道の、八塩道の塩の八百会に坐す速開つひめといふ神、持ちかか呑みてむ。かくか呑みては、気吹戸に坐す気吹戸主といふ神、根の国・底の国に気吹き放ちてむ。かく気吹き放ちては、根の国・底の国に坐す速さすらひめといふ神、持ちさすらひ失ひてむ³⁶」（傍線筆者）とあり、

潮の八百路の大海原に運び出されたもろもろの罪は、最後に「根の国・底の国」に破られるとされるのであるから、鎮火祭及び大祓の祝詞では、黄泉国・根の国・ワタツミの国は、「下つ国」あるいは「底つ国」として、地底の国という共通概念で総括されていたものと考えられる。

この他にもワタツミの国と前二者の他界とは、重層する部分がいくつかある。

根の国譚では、須勢理毘売という他界の巫女によって大穴牟遲命は数々の試練を克服して王として再生し、政治的・宗教的支配力を手中に入れた。山幸彦も海宮の巫女豊玉毘売と結婚し、結果的には失った鉤を見つけ出し、危機を突破していく。顕国に戻った新生の二人の王は、他界において得た靈性によって、それぞれが兄を屈服させて支配者としての地位を不動のものにしていく。大国主神は出雲地方の首長として国造りを完成させ、山幸彦も兄を従えて、人皇第一代神武天皇の父としての位置を占めているのである。それらはすべて他界からもたらされた呪力によるものであった。すなわち、大国主神は、「生大刀・生弓矢」という武器によってシンボライズされる政治的支配力と、「天の詔琴」という神を招き寄せる聖なる楽器にシンボライズされる宗教的支配力を得た。山幸彦も「塩盈珠・塩乾珠」をワタツミの国から持ちかえることによって、兄を従えて人皇第一代・神武天皇の父としての偉大な資格をアピールする。折口は海宮の他界の特質を「富の国であるが故に貧窮を司る事も出来たのが、わたつみの神の威力であった³⁷」とその靈能を明快に別決してみせし、さらに「古き世の我が國人の抱いていたワタツミの国の觀念、信仰の主要な一要素が、この靈界に於ける水の神秘的な

勢能であったからの観想——切言すれば水の一つの用としての灌漑水の自在なコントロールを通して農耕経済、殊に稲作経済における豊饒を齎らす勢能が、この霊界の一特性をなすという観想であったことを間接的に露呈させている⁽³⁸⁾という松村の指摘も重要な肯説と言えよう。

すなわち、根の国・ワタツミの国は、共に豊かな力や豊饒の源泉・重要な霊能の根元という観想が打ち出されているのである。こうして、根の国・ワタツミの国は、今さらめくが機能的にも構造的にも類似する側面があることが強く認識されるのである。

右に見てきたように、わたつみの宮は、ことさらに富や豊穡との結びつきが強い。これが、常世という理想郷に流れ込むのは言うに及ばない。(常世他界は、要するにユートピア他界であるので、ここでは説明を省きたい。)

ところで、わたつみの国と言えば、右に見てきたように、一般的には豊穡・仙郷の他界としての面が強い。しかし次の万葉歌

沖つ国 うしはく君の 塗り屋形 丹塗りの屋形 神の門渡る(十六―三八八八)の「沖の国うしはく君」について真淵が、「黄泉をいふなり」とし、武田祐吉もこれをうけて「遠方の国で、死者の行く国、黄泉の国をいう」とあり、⁽³⁹⁾海のかなたが死者の行く他界であったことも伺わせる。

さて、これまで見てきた日本古代他界の(四)地底他界(黄泉国)、(五)根の国・妣の国、(六)わたつみの国に相当する古琉球の他界が、ニライカナイ複層の他界である。この他界については、今さら筆者の

贅言など不要である。ただ、その機能が、(一)五穀発祥の地、(二)火の発生地、(三)靈力の源泉地、(四)祖霊の地、(五)富・豊穡・幸福の地、(六)悪しきもの。災禍の祓われゆくところと多様性を見せている。構造的にも、海底、地底、浪路はるかの彼方とさまざまに観想されていることを指摘することにとどめた⁽⁴⁰⁾。

三

以上が、他界と聞かれて誰もがたちどころに挙げていく他界の諸相であろう。だが、この他にも日本⁽⁴¹⁾の他界はまだまだ存在する。

西北方を、祖霊の鎮まる方位として信仰したことは、三谷栄一先生が「日本文学の民俗学的研究」の中で、「戌亥の隅の信仰」として数限りなく例証し、詳述されたところであった。戌亥信仰も、他界信仰の考察において極めて重大な信仰であるが、繰述の煩を避けたいので、すべては三谷前掲著書の閲覧に委ね、再度、戌亥(西北)の方位が祖霊の地として重大に認識されていたことに今は注意を払っておきたい。

複雑多岐に亘る日本古代他界信仰は、この他にもまだ重要な他界を残している。東西軸の問題にからむ東方神界としての伊勢・常陸があり、一方には西の鎮めとしての祖霊の地出雲の国がある。

さらに、これもよく口唇に上ることであるが、大和の南方すなわち吉野の山々を聖なる方位として捉えていたことは、持統女帝が30回以上に及ぶ異常な吉野行幸がよく引き合いに出されるほどにあまりに有名な事実である。神聖他界・南の吉野についても言及された論文は枚挙にいとまがないが、最近、渡瀬昌忠氏は「人麻呂文学の異空間」において、五つの異空間を挙げ、「それらの、山のかなた、川のむこうの聖なる異空間は、歌の場の条件に応じつつ、それぞれ異色ある人麻呂の代表作を生み出しているのである。挽歌における殯宮とともに、もしそのような異空間がなかったとしたら、飛鳥京時代の人麻呂文学は（注略）ほとんど存在しなかったであろう。」と論断しておられる。全く同感である。そして氏は、この五方位と陰陽五行の方位との関係については触れておられないが、指摘された五方位は、陰陽五行の方位の哲理から見れば、それぞれが重大な方位である。後述するが、ここでは南の吉野にも神聖他界としての認識があったことを押さえておきたい。

吉野を北にたどっていくと、古代の都飛鳥がある。この飛鳥を軸にしてさらに北方に（つまり飛鳥を南とする南北軸）、六六七年の天智天皇の近江遷都にはじまり、七九四年桓武天皇の平安遷都に至る約百三十年間に、南北の子線上の遷都が実に六回も行なわれていた事実を指摘されたのは吉野祐子先生であった。⁽⁴²⁾ すなわち、北の子方を重視する思想が看取されるということであろう。

事情は古琉球においても寸分違わず類似する。東方神聖他界に比定される神界の島久高、その直線上の西の果てに押さえられている久米島……中央に聖なる御嶽・サヤハ嶽をさむ琉球最長の東西軸

を捉えている古琉球の人々の認識を我々は決してみのがしてはなるまい。神々の天降りする最大の霊場サヤハ御嶽のほぼ戌亥の方角を見やれば、誰もが王城の首里が位置していることにすぐに思い至るに相違ない。目を転じて、首里の北方に注目すると、ほぼ真北に伊平屋・伊是名を確認することが出来るよう。何故に第一・第二尚王統とも、この北方に位置する小島を自らの本貫の地とこだわり続けたのか。これら他界と方位の關係に一応の筋道をつけて説明をつけなければ、日本民族の他界観はいつでもヴェールにとざされたままになるう。

では、これまで雑然と挙示してきた他界を整理統合するとうであろうか。古代信仰を取り扱う場合、まずもって時間と空間を押さえることがきわめて肝要であることは、諸先覚が揃って教示される場所である。そこでこれら他界信仰を、空間すなわち方位という視座から振り分けてみると、次の四つの信仰軸に帰納されるのではなからうか。(一)内は古琉球の場合である。

一 東西軸の關係

伊勢——大和、常陸（鹿島神宮）——出雲（出雲大社）、⁽⁴³⁾東方わたつみの宮・常世——此界（葦原中国）

〔久高島——首里、久高島——サヤハ嶽、久高島——久米島、東方ニライカナイ——古琉球諸村落〕

二 垂直軸の關係

天上他界——虚空他界——山上(中)他界——地底他界

〔天上他界——山上(中)他界(御嶽信仰)——地底他界〕

三 戌亥(西北)——辰巳(東南)軸の關係

大和——出雲

〔サヤハ嶽——首里、久高——伊平屋・伊是名〕

四 南北(子午)軸の關係

平安京——長岡京——平城京——藤原京——大津京——飛鳥京

〔伊平屋・伊是名——今帰仁——辺戸——首里——知念〕

右のように整理統合して大過なからうと思われる。では、これら四つの信仰軸の新旧關係はどうであらうか。かく推移していく背後にいかなる契機があとづけられるのであろうか。他界信仰の正当な把握のためには、是非にも解明されねばならぬ点であらう。次にはこのことについて考えてみたい。

四

日琉の古代の他界の特質はと問われたならば、古代人は生死を対立的に捉らえるのではなく、統合

的に把握していたことをまっさきに挙げたい。このことは、古代人のするどい直感と深い洞察に依るものと思われるが、彼らはいち早く宇宙の原理を掴み取っていたと言えよう。

すなわち、生きとし生けるものすべての生命には榮枯盛衰、隆替の激しさは不可避である。人間から小さな動植物に至るまで、はたまた有象無象の森羅万象には、まず生があつて壮んになり、やがては必ず死がおとずれる。陰陽五行では、これを「生・旺・墓」といい、「三合の理」という重要な哲理が展開される⁴⁴⁾。宇宙の森羅万象は、終ることなく、生・旺・墓をくり返しながら、絶えず輪廻転生がはかられていることを説く哲理である。

古代日本人も、五行の「三合の理」に触発されることなく、その直感と洞察力は、いち早く生・旺・墓の輪廻転生の原理を体得していたものと考えられる。そして、古代日本人は人事・諸事象の生・旺・墓を、天象の最たるもの、しかも彼らの日常生活に不可欠なもの、すなわち太陽の運行に重ねていったものと思考される。

古琉球の太陽に例示を求めよう。

「おもしろさうし」では、水平線の彼方から、多彩なまばゆい光を放射しながら昇る太陽の美しさを、「明けまでもどろ」(十三―八二五)、あるいは「明けもどろの花」(十三―八五一)と讃えている。生まれたての美しい明けもどろの花も、昼には頭上で、ギラギラと焼き尽くすようなまでに旺んな光を放射するが、やがては真赤な火のような落日の光芒を放ちながら沈んでいく。沈んだ(墓)太陽は、

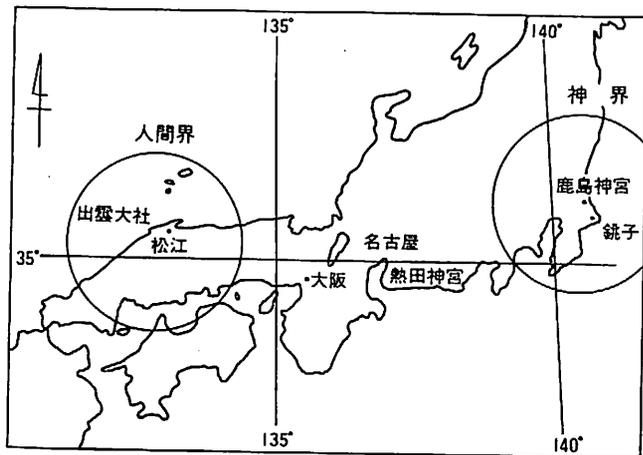


図1

は、東西の信仰軸を観念的に捉えるだけでなく、地理的にも精確に測定された東西軸として把握していたことを、吉野祐子氏は、上図を示して次のように力説された。⁴⁵⁾

(1) 日本国土の東西の最長線、東の鹿島と西の出雲を結ぶ線をすでに発見していたこと。

(2) この線上の中央に熱田神宮を置いていること。

以上のことを挙げて、鹿島神宮のある常陸(日立)は「葦原の中国」でありながら同時に神界であった。同様に出雲は「葦原の中国」でありながら同時に呪術的に人間界であり、西の果てということから死者を送り出す世界の入り口と意識されたというわけである。記紀神話を見ても出雲神話の中の神々の死や国譲り(敗北)の話、出雲を黄泉の国に比定していることなども確かにそのような把握の結果であろうと首肯される。⁴⁶⁾

「太陽が穴」(十一・五二四)を通じて、「太陽の穴の瑞日」(十一・五三二)となって、再び「明けもどろの花」と咲いて東の朝空に新生する。古琉球の人々は、この不斷にくり返される太陽の運行に、宇宙の有象無象の輪廻転生の哲理を重ねていったものと推察される。古琉球以来今日に至るまで、沖縄では東をアがり、西をイリと言いが、むろんこれは太陽の運行に即した名称である。したがって太陽の生まれる東に神聖他界を想定し、祖霊・人種・火の神・水の神・豊稔の一切の根源地と観想されることが多い。いわゆる、ニライカナイである。ニライカナイは、方位も所在も区々ではあるが、東方に想定されることが多いのはこのためであろう。

これに対し、太陽の没する西方は死の方位であった。死者は必ず西向きに西枕をされる。ユタの霊姿で、病人が西に向って歩いている場合は死に、東に向っている場合は治ると言われるのも、右に述べた太陽の運行・輪廻転生の思考に基づくものである。これは仏教の西方浄土と関係なく捉えられていた世界の方位であった。西に死んだ生命は輪廻し、東に祖霊となったり、あるいは人種として転生をくり返すのである。先に見てきたように、古代の他界が常に生死を統合しているのは、実にこの太陽の不斷にくり返される輪廻転生の運行によっているものと思考されるのである。

やはり古代日本においても全く事情は同様である。東西の方位も東を日向し——東、日の往にし——西と太陽の運行に基づいての名称になっている。以上のように東西の他界軸(水平軸)は、日本古代信仰軸の根幹を形成していたことは今日ではほぼ定説であると言ってよい。さらに古代人

古琉球の人々もまた、東西軸を觀念のみでなく、地理的にしっかりと把握していたふしが伺える。古琉球における東の神界は当然久高島⁽⁴⁷⁾であるから、久高・サヤハ嶽を結ぶ東西軸の西の鎮めは、その延長線上の久米島になることはこれまた至極当然である。

古来から久米島は、沖縄史の中でも特別な位置を占めてきた。「おもろさうし」でも、久米島オモロは軽視出来ない質量を示している。古文書類も多く残されており、また、独特の神女組織がしっかり根を下ろし、今日においても宗教的機能を果たしているところでもある。神女を重視するのが古琉球の宗教組織であるから、当然と言えば当然だが、東西軸における東の神界は人種^{ウチナー}をもたらす男の領域とされ、西の人間界は人を生み出す女の領域として陰陽のバランスがはかられていく。久米島における確固たる神女組織の残存は、女の領域たる西の鎮めとしてのことさら強い意識が代々受け継がれてきたものと思われる。記紀神話における西の果て出雲も、むろん女の領域であり、イザナミは死してこの地に葬られた。出雲をして「妣の国」と呼ぶ理由もそこにある。

しかしながら、古琉球における東西軸の西の果て久米島は、記紀神話の西方位とは大きく様変りした、新しい、信仰的・思想的展開があとづけられる。実は、この点と、後述する王府の北方重視の姿勢の中にこそ、古琉球の信仰軸の大転換、すなわち本稿のテーマの陰陽五行思想の導入が認められるものである。

西の果て久米島に、新しい信仰的・思想的所産が見られる第一点は、古代日本の西方位における、

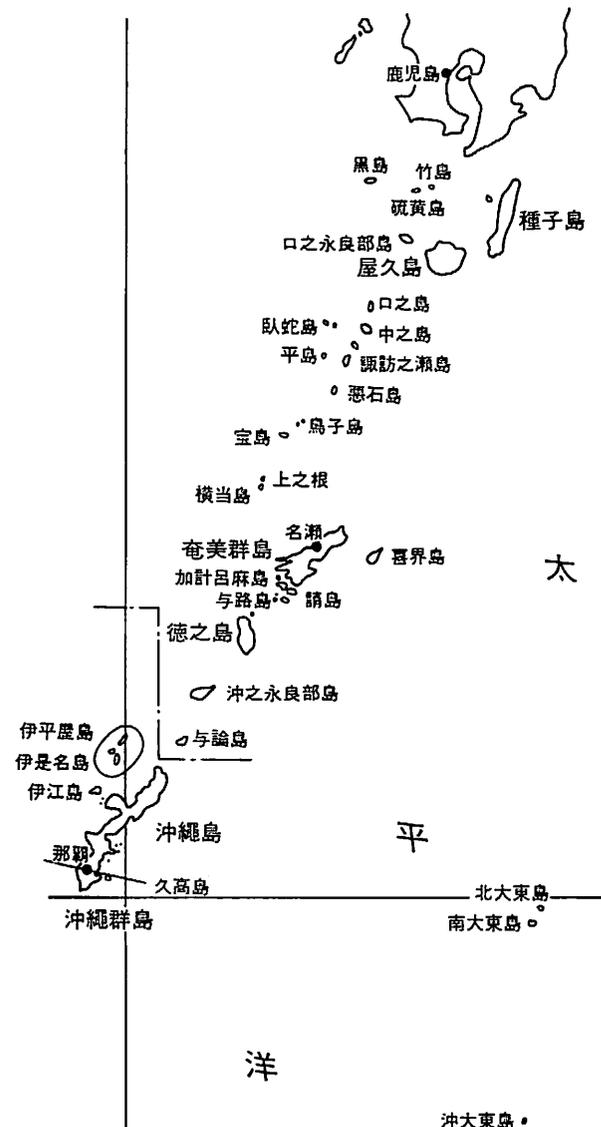


図 2

五行配当図 3 図

五行	五色	五方	五時	五事	五星	五臟	五常	五虫	五味	五声	十干	十支	易卦	月	考	備
木	青	東	春	貌	歲(木星)	肝	仁	鱗	酸	角	甲	寅・卯・辰	震	旧二・三・月	(種・稷) (太極・神) (父性・男)	
火	赤	南	夏	視	榮(火星)	心	礼	羽	苦	徵	丙	巳・午・未	離	四・五・六・月		
土	黄	中央	土用	思	墳(土星)	脾	信	倮	甘	宮	戊	辰・戌・未・丑				
金	白	西	秋	言	太(金星)	肺	義	毛	辛	商	庚	申・酉・戌	兌	七・八・九・月	(五穀の稔り・戦い・金銀財宝) (人間・女・母性)	
水	黒	北	冬	聽	辰(水星)	腎	智	介	鹹	羽	壬	亥・子・丑	坎	十・十一・十二月		

備考欄の () は日本古代信仰に象徴されるもの

〔 〕 は陰陽五行思想に象徴されるもの

注：本配当図は、吉野祐子先生の一連の著書より転載した。

なお、備考欄は筆者が加筆した。

死の国・死者の国という顕著な特性が見られず久米島が世界への入口、死の国と観想されてない点である。このことは、現実的に久米島が豊穡の島であったことに起因する。久米島はその名の示す通り、稲作が盛んな島であった。稲作に関する御嶽や神名があつて、かなり古い時代から稲作が行なわれていたらしい。現実的に豊穡の島を、いくら呪術的宗教的ドクトリンとはいえ、死の国と置き換えることは不可能であつた。そこで豊穡の島にふさわしい新しい信仰的、思想的哲理が導かれた。第二の特徴としての陰陽五行思想である。陰

陽五行思想の概説は紙幅の都合上、別の機会に譲らざるを得ないが、ひと口で言えば、宇宙の万象といえども、その構成素は、五気もしくは五元素(木・火・土・金・水)のはたらきに環元される。すべては、この五気・五元素によって、宇宙の諸事象に配当されていくのである。五行の五は、五気・五元素のことであり、行とはそのはたらきをいう。五行は宇宙のすべてに及ぶが、五行の主な配当項目を挙げてみると、五色(青・赤・黄・白・黒)、方位(東・西・南・北・中央)、季節(春・夏・秋・冬・土用)、内臓(肝・心・脾・肺・腎)など、万象が五行に配当されるのである。いずれ詳述されなければならぬが、当面、必要なことを図示してみると次のようである。

五行配当図(前頁参照)に見るように、西方(久米島)は、五行思想で季節は秋に当り、秋は五穀の稔りのもたらされる季である。これが現実には豊穡の島である久米島にとっては、好都合であつた。あるいは久米島という地名の由来もこのあたりに求められるのかも知れない。久米島をやや上にたどると、粟国島がある。米といふ粟といふ、五穀に関係する地名が揃つて西の方位に位置していることは、どうやら偶然ではあるまい。東方神界久高島に対していく久しく神界として高(たつ)くりつばであれという言霊に対し、西方人間界の久米島は、いく久しく五穀の豊穡をもたせと寿ぐ言霊に、人智の片鱗を求めるのは穿ちにすぎないであろうか。

西の久米島に五行の哲理を見るのは、次にいくつかの例証の用意がある。

「おもしろさうし」では、久米島のことを「金の島」と謡っている。「金の島」は、徳之島(十一・五)

四、十三―八六八）や、首里（五―二七九）にも用いられている。徳之島はどうであるか深く考えが及ばないが、首里は黄金の意の美称であろう。久米島に対する使用例は群を抜いている（三―九六、十一―六二五、十三―九五五・九五六、二十一―一四八三）。また「君南風由来并位階且公事」にも「かねの嶋たて、⁴⁸」とあって、久米島——金の島の認識がかなり濃厚に看取される。だが事実としての金の採掘は、可能性は考えられるが、現今、考古学的には、まだ強い説得力は乏しい。してみれば「金」に結びつく別の手だてを求めると他はあるまい。別の手だては完璧に存在した。陰陽五行の理である。五氣のうちの金氣は、前掲五行配当図に示したように西方に配当される。しかも五行で西方金氣は、金銀財宝の在り処であった。

お伽噺に例をとると、「ここ掘れ、ワンワン」の件のあの犬は、五行配当図の十二支で言えば「申・酉・戌」のうちの戌（犬）に当り、これらは金氣の動物である。したがって、犬は正直者の慈悲深いおじいさんのために、自らの金氣の呪力で、「ここ掘れワンワン」と黄金を出してみせるのであった。

「桃太郎」も然りである。桃は西方金氣の果実である。鬼退治に同行した猿・雉・犬は、十二支で言えば申・酉・戌ですでに述べたように西方金氣の動物である。金氣の桃太郎は、同氣の家に助けられて鬼を退治し、金銀財宝を手中におさめるのである。⁴⁹

このように、西方金氣の例は、日本各地の民俗・祭祀・儀礼・お伽噺の中にもいくらかでも挙示することが出来るものである。おそらく久米島——金の島は、美称であるよりも、五行思想・西方金氣による呪的心意を託した言挙げと理解した方が用例の多さから言って妥当であろうと思われる。

五行思想のあとかたは他にも見つけ出すことが出来る。シラシ御嶽の神名は「ヨキノタケ大ツカサ若ツカサガナシ」⁵⁰となつてゐる。「久米仲里日記」にも「ヨキノ浜」⁵¹とある。ヨキノタケ、ヨキノ浜のヨキは共に「雪」の白さを言うのであろう。これも五行配当図に示した西方色彩の「白」を示すものと思われる。雪の嶽、雪の浜も美称であるよりは、西の嶽、西の浜で、東方神界からの神来臨を、西方人間界の嶽や浜で迎えたことを意味するものであろう。「おもしろさうし」で与那原の浜や嶽に同様に雪が冠せられているのも、東方の神々を西方で迎える心意と解される。与那原もまた、西方人間界にふさわしい神迎えの地であるはずである。ところで久米島の雪——白は、当然別の心意すなわち、西方五穀の米の白さをも詮表するものでもあろう。日本各地の年中行事・民俗祭祀に見る白色の食べ物、東北地方の餅犬の餅、日光強飯式の強飯、山形の豆腐祭りの豆腐、栃木を中心にするシモツカレの大豆……これらはすべて、五穀西方・白色西方の五行の哲理をふまえたものであることもすでに解明されている。⁵²したがって久米島のヨキも、雪——白——米——西となつて、五行思想を背景に負う西方位を示すものと思考されるのである。

さて、以上に述べてきたことを振り返つてここで一たんまとめてみると、

(イ)久米島・粟国と揃つて西方に五穀の稔りに関係する地名が置かれていること。これは、東方からも

たらされる五穀の種が、西方において、季節で言えば秋に、食物としての五穀に結実がはかられる五行西方位であること。

(口考古学的・地質学的根拠が薄弱であるにもかかわらず、久米島——金の島と称揚されている事実。

これは、西方金気の五行方位による呪的心性を伴った言挙げであること。(首里——金の島は、前述のように王城を黄金の地と讃えた美称。)

(古琉球の信仰軸(東西軸)にとつて重要な地久米島が、特に雪・米でもって、その白色西方位が強調されていること。(祭祀的に重要な与那原も同様の思考。)

以上のように、久米島に関する重大な疑問点は、陰陽五行の哲理を足がかりにすれば、いずれも十分な説得力が得られるものである。しかも、五穀の結実としての西方位、金気西方、白色西方と三拍子も揃って五行の哲理が踏まれている事実は、古琉球と大陸陰陽五行思想との邂逅を想定せずしては、もはや解明が不可能であろう。

西の鎮め久米島には、さらにも五行思想の影が濃厚につきまといっている。最後に極めつけの例証を示そう。

尚真王が八重山征伐をする際に、神のお告げが下りた。八重山の神々をやつつけるには、久米島の君南風を連れて行けという例のお告げである。結果は神託通りの大勝利を得たが、何故に久米島の神々でなければならなかったか。常々この疑問を問いつづけていたが、これにも五行の理が隠されていた。

五行思想では、西は季節でいうと秋である。中国の兵法によれば、収穫を終えた秋は、武を練り、不義・不忠・違法の者を討伐する季であった。西の方位と秋の季節は、戦いにとつて最も大切な気である。何となれば、西方金気の金は、武器を生産する最大の材料でもある。したがって時宜に叶った戦いは、必ず不義・不忠・違法の者を討伐し、戦勝をもたらすはずのものであった。むろん、八重山の神々は討伐され、大勝利となり、君南風は王府から多くの褒美をもらうことになった。何故に西の久米島の神々が参戦しなければならなかったか、ここに至るともはや古代信仰だけではどうにもならない。陰陽五行の理を導入してはじめて、解明の光は灯されるのである。

以上が、日琉における東西軸に対する人々の把握である。古代日本は、東西軸に対して日本個有古代信仰の枠をはずすことなく、五行を受け入れている。古琉球は、一面、東西軸に対する古代信仰に強くこだわりのつ、反面、実にあっさり完璧なほどに、陰陽五行思想への濃厚な傾斜を見せている。しかし、古代日本も、大陸の陰陽五行の奥深い哲理に邂逅するや、たちまちにして信仰軸に大転換がもたらされた。古琉球また然りである。大和の覇者も琉球の王者も東西軸の古代信仰をあくまで死守しつつ、北へ北へと目を奪われて、ついに南北の子午軸へと、したたかにのめり込んでいくものである。

筆者に与えられている紙幅には限りがあり、すでにしてはるかにその限りを超えてしまっている。垂直軸の問題、戌亥・辰巳の関係、さらには子午軸の解明……これらはすべて次稿に譲りたい。

注

- (1) 統治者が、国家的構想・政治理念・神権統治の結実化へむけ、古伝承に接近し、新しい宗教的・政治的神学を形成していく過程については、筆者もかつて考えてみた。(『おもしろさうし』の政治性―その一『沖縄文化』63)その後、統編にかかってすぐに、この問題が中国の陰陽五行思想の哲理と密接につながっていることに気付き、大きく挫折した。本稿は、その統編にもなるかと思う。
- (2) 天武天皇の長子。母は胸形徳善の娘尼子娘。母の身分が低かったため、草壁・大津に次ぐ格付けとなった。古代、皇位決定の要因に母の出自が重大に左右した。この問題は、淵源をたどれば、女の靈性・古代の女の位置等に関係するか。古琉球の女の位置を考えると興味深い。
- (3) 聖武天皇の子。母は県犬養広刀自。
- (4) 正宗敦夫・森本治吉、『万葉集大辞典』
- (5) 天武天皇の皇太子。母は持統天皇
- (6) 『日本書紀』神代下第九段一書第一 日本古典文学大系『日本書紀』144頁
- (7) 万葉歌 布施置きて 我は祈ひ禱む あざむかず 直に率行て 天道知らしめ (五―九〇六)の「天道知らしめ」の場合は、仏教語で、弥勒信仰と関係があるらしい。したがってこの場合は新しい観念であり、前出歌とは信仰内容が異なる。
- (8) 『日本書紀』神代下 第九段一書第一 日本古典文学大系『日本書紀』148頁
- (9) 本居宣長 『古事記伝』全集第九卷121頁 筑摩書房
- (10) 宣長前掲書 第十卷251頁
- (11) 益田勝実 「神話的理想の表層・古層」『日本文学』昭和53年・一
- (12) 三谷栄一 「古代文学における異空間」『日本の文学』第一集 有精堂

- (13) 宮良当社 「八重山語彙」
- (14) 宣長前掲書 第九卷251頁
- (15) 「阿米都知」と表記されている例は、五―814がある
- (16) 「安米都知」と表記されている例は、十五―3682、十五―3740、十五―3750、二十一―4499などである。なお「東歌」では「阿米都之」(二十一―4392、二十一―4426)と訛っている。
- (17) 「古事記」 日本古典文学大系、129頁
- (18) 他の万葉挽歌を見れば、死―山―他界の観想はきわめて明白である。例えば大伴坂上郎女が、厄理願の死去を悲しんで作った長歌には、「……あしひきの 山辺をさして 夕闇と隠りましぬれ……」(三―四六〇)と歌われたり、また高橋朝臣が死にし妻を悲傷しんだ長歌にも「……吾妹子が 入りにし山を……」(三―四八二)とあって、死者は直ちに山に向い、山を死後の他界と観想していた。墓を「山陵」「山墓」と表現するのも、このあたりに理由が求められよう。
- (19) 倉野憲司 「古事記全注釈」第四卷 227頁 三省堂
- (20) 仲松弥秀 「沖繩大百科事典」中294頁 沖繩タイムス社
- (21) 「琉球国由来記」 琉球資料叢書二 578頁 東京美術
- (22) 前掲「琉球国由来記」 321頁
- (23) 〃 〃 554頁
- (24) 〃 〃 582頁
- (25) 松村静雄 「日本語大辞典」1340頁
- (26) 「古事記祝詞」 日本古典文学大系 143頁
- (27) 万葉歌37番歌は「死還生」の三字をヨミガハリと訓んでいる。語源は「黄泉路帰り」か。

- (28) 宣長前掲書第七卷 303頁
- (29) 西郷信綱 「古代人と夢」 平凡社選書
- (30) 倉野前掲書 第三卷231頁
- (31) 「古事記祝詞」 日本古典文学大系 73頁
- (32) 同右 147頁
- (33) 宣長前掲書 第十卷 243頁
- (34) 「日本書紀」 日本古典文学大系(上) 159頁
- (35) 「古事記祝詞」 日本古典文学大系 143頁
- (36) 同右 425頁
- (37) 折口信夫 「古代研究」 国文学編205頁 民俗学編494頁 中央公論社
- (38) 松村武雄 「日本神話の研究」 第四卷430頁 培風館
- (39) 真淵説、武田説共に 澤瀉久孝「万葉集注釈」巻第十六 257頁より転載
- (40) ニライカナイ他界と記紀他界の機能的・構造的対比については、拙稿「他界の原像」(国士館短期大学「紀要」第十号)を参照されたい。
- (41) 渡瀬昌忠 「人麻呂文学の異空間」『日本の文学』第一集 70頁 有精堂
- (42) 吉野祐子 「隠された神々」 64頁 講談社現代新書
- (43) わたつみの宮は必ずしも東方とは限らない。しかし、場合によっては、東方と明示されることもある。ニライカナイについても同じである。
- (44) 「三合の理」は、「淮南子」天文訓に見られる。「五行大義五巻」にも、四種三合・総合図がある。最近、中村璋八氏による「五行大義全釈」が刊行された。(明治書院)四種三合総合図については、196頁参照。な

- お、吉野祐子先生の一連の著書にも詳しい解説がなされている。
- (45) 吉野祐子 「陰陽五行思想から見た日本の祭」 24頁 弘文堂。なお、図1は吉野上掲著より転載した。(23頁)
- (46) イザナミの死、事代主命の入水(自殺)、大国主命の國譲り(敗北)など。
- (47) 久高島のさらに東の海上に南北大東島が点在するが、古琉球の往時、政治的・國家的・宗教的使命を帯びた東方神界・神聖他界は、統治者にとっても常民にとっても遠すぎても使命は十分に果たし得ない。指呼の間にあって、日々目のあたりに確かめ得る距離になければ、神権統治の実も上げ難くなる。また実際、「琉球国由来記」にも兩大東島の記載が見られないので、視野の及ばないところであったと思われる。
- (48) 「君南風由来并位階且公事」「沖繩久米島」資料篇 63頁 弘文堂
- (49) 吉野祐子 「陰陽五行と日本の民俗」 224頁 人文書院
- (50) 前掲書(48)「久米島の民俗遺跡」 43頁
- (51) 前掲書 「久米仲里旧記」 59頁
- (52) 吉野前掲書 74、90頁
- (付記) 脱稿後、「猫の民俗学」(大木卓著・田畑書店)という好著があることを知った。しかし、陰陽五行との関係は触れられていないようである。